The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	”この道を歩いていきます”：『狂気な倫理』第Ⅱ部への論評と質問
Author(s)	ほんま，なほ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 45-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94558
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第９回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）
テーマ「狂気な倫理：「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定」

“この道を歩いていきます”――『狂気な倫理』第 II 部への論評と質問

ほんまなほ

はじめに

みなさん、はじめまして、ほんま なほ です。わたしは、大阪大学でキョーインをしていますが、じぶんのことを、いちども、ケンキューシャだと おもったことはありませんし、ハカセゴーももってません。ケンキューらしいケンキューもしていません。大阪大学ではたらきはじめたのは、そのときのキョージュから、リンショーテツガクという、まだかたちもわからないが、とにかくなにかをはじめたい、とさそわれたからで、そもそも、ダイガクも、ガッカイも、ケンキューシツも、ケンキューも、ちっとも、いごこちがよくなかった わたしにとって、そういうのを、ぜーんぶつくりなおす、というのが、おもしろかったから。そんなわたしは、ダイガクにあなをあけて [1]、そととなかのひとがであう [2]、ガクセーとそとにあそびにいく [3]、いろんなひとがはなしあう [4]、こえ・ことば・からだで、なにかをつく

---

[1] 2005 年に大阪大学につくられたコミュニケーションデザイン・センター（2016 年から CO デザインセンター）は、「専門分野」のあいだにあるかべにあなをあけて、大阪大学でまなぶひと、大阪大学のそとでまなぶひとたちが、いったりきたりしながら、〈訪問〉〈対話〉〈リテラシー〉〈表現〉〈協働〉をやってみる科目をはじめた。

[2] CO デザインセンター開講科目「感性表現術（音楽）」：沼田里衣さん、音あそび工房のみなさんと、あそびながら、そのばでうまれるものをたのしむ

[3] 「訪問術」：モンダイではなく、いきているひとからまなぶために、ひとがキョーシツにきたり、キョーシツからそとにでていったりする

[4] 「対話術」：そのばにいること、ことばをわかちあう

る[5]、ガクセーのやりたいイベントをてつだう[6]、ダイガクをすこしでも、いごこちのよいところにかえる[7]、そのためのひろばをつくるのが、わたしのしごとです。★1

わたしにとって、フィロソフィとは、ひととであって、いっしょになにかをする、というおこない、だれかと、ともだちになるための、おしえです。釜ヶ崎でであった長谷康雄さんのうた、「おかま人生」を、水俣でであった坂本しのぶさんと柏木敏治さんのうた、「これが、わたしの人生」を、たんぽぽの家でであった山口広子さんとつくった「おかあさんのうた」を、ジュギョーでうたう。新潟から旗野秀人さんをまねいて、いっしょに『阿賀に生きる』をみて、ことばをわかちあう。ダンサーの佐久間新さんをまねいて、ガクセーたちといっしょに生野コリアタウンで、まちとおどる。沼田里衣さんとそのなかまたちをまねいて、おととあそぶ、そのばでうまれるものをたのしむ。ドラァグクイーンのヴィヴィアン佐藤さんをまねいて、釜ヶ崎のなかまたちと、おおきなかみかざり（「ヘッドドレス」というらしい）をつくって、まちをねりあるく。つまり、それであったなにか（to ti ên einai）をもとめるのではなくて、あるひとのいきざまにふれて、そのひととともに、なにかをする、しないではいられない、という、きのふれたさま、それがフィロソフィだと、おもうのです。

わたしは、じをよんだり、かいたりするのが、ニガテです。（ずうっと、もじをめでおっていると、アタマがいたくなります。）この『狂気な倫理』も、じばっかりで、ぶあつくって、すみずみまでは、よめませんでした（ごめんなさい）。とっても、たくさんのことが、かかれています。でも、だれ、どんなひと がかいているのか？　だれにむけて？　どんなかおつきで？　どんなこえのちょうしで？　どのようなみぶりで？　どんなところで、かんがえているのでしょうか？　それでも、こえのようなものは、きこえてきた、とかんじています。その、こえのようなものは、なにかを、けんめいにうったえているようです。

「あとがき」に、「これらの論考はごく普通のことしか主張していない」（297 ページ）と、カッコのなかでひっそりと、かかれていました。わたしも、それぞれかかれていることは、「ごく普通のこと」とおもいました。これがタイトルでよかったはずです。でもなぜ、「狂人の声、愚かで、不可解で、無価値とされている生を一貫して肯定する」と、かまえられているのでしょうか？　また、「まえがき」にあるように、「世間一般的には「愚か」で

---

[5] 「表現術（クリエイティヴ・ライティング）」「身体表現術」

[6] 「協働術」「横断術」：じぶんたちがかんがえたいことを、わかちあい、かんがえるための、ばしょをつくる

[7] たとえば、「臨床哲学」をまなんだひとたひちと、大阪市生野のコリアタウンで「いくのふらっとだいがく」をはじめる（2022 年）

「不可解で」「無価値」とされがちな生に「意味」を見いだそうとする営み」が、なぜことさらに「狂気」となづけられるのでしょうか？　「されがち」とはどのようなことでしょうか？　「「意味」を見いだす」のは、だれが、どこで、なんのためでしょうか？　“コーテースル”とは、いったいだれが、だれにたいして、なにをすることなのでしょうか？　ともかく、こえようなものに、みみをすますと、それは、なにかにあらがっているのだ、そのあらがいからきこえてくるものなのだ、ということがわかってきました。このひとたちは、コーテーというより、テーコーしている、と。

「狂気からの反撃」は「肯定」なのか？

なににあらがっている、のでしょうか？　ためにし、「まえがき」にひかれている吉田おさみの『“狂気”からの反撃』（1980 年）をよんでみると、こうかかれています。

> 狂気は本来アンチ（＝反）なのですから、現体制－日常意識を一定の方向へ誘導することはできません。つまり狂気は状況支配の不可能性を意味するのですから、規範形成には役立たず、体制づくり（枠組づくり）という意味での建設とはむしろ相反します。ただ狂気とは自由性・意外性のことですから、あらゆる可能性を秘めており、ある種の狂気は先見性・創造性をもつことになります。（『“狂気”からの反撃』29-30 ページ）

> 狂気は否定的現実の未来的のりこえという側面を有しています。特に高度に科学が発達し、産業が機械化され、官僚的機構が整備されている現代社会では、存在が人間の自由を蹂躙し事物の論理が貫徹され、人間は機械や機構によってガンジガラメにされていますが、狂気はこのような現代社会に対する最もラディカルな、そしてその都度の否定です。狂気は未来的目標を意識的に設定し、それに向かって合目的々に行動を規制していくものではありませんが、それ故にこそかえって、その現実否定は根源的といえます。狂気が社会にいれられたとき、それは狂気でなくなるとすれば、逆にいえば新しい体制が生れると新しい狂気が生れます。そして狂気は体制に対する反逆ですから、いかなる体制においてもキチガイは永遠に反逆者として存在します。（『“狂気”からの反撃』30 ページ）

なるほど、『狂気な倫理』からきこえてくるのは、吉田おさみのいう、「体制に対する反逆」、「アンチ」のこえなのかもしれません。たしかに、「アンチ」がひびいています。たとえば「第Ⅱ部」は、ドーイに、ショユーに、ホーセツに、アンチをとなえています。これらは「現代社会に対する最もラディカルな、そしてその都度の否定」にあたるのでしょうか。だとすると、この「反逆」のこえは、「肯定する」といより、ドーイを、ショユーを、ホーセツを、「否定」しています。ところが、「第７章」はアンチではなさそうです。そういえば、むかしむかしギリシアというところに、ἀντι ということばがありました。それは、そのかわりに、といういみもありましたね。そのいみでは、「第７章」は、どのような「新しい体制」にあってもうまれるもの、そのかわり、をえがいている、のかもしれません。それは、わたしたちを「永遠に反逆者として存在」する「キチガイ」をもとめるたびにつれていってくれるミステリー、いまはない、きえてしまった、ひとびとのいきたまちにトリップさせてくれる、ブンガクにほかなりません。「都市の「洗練」（ジェントリフィケーション）は、その文字通りの作用により、いかがわしいとか、規範的でないとされてきた性のありようを、大きな資本の動きによって――たしかに存在したにもかかわらず――無かったことにしてしまう」（162 ページ）にもかかわらず、このトリップのなかで、わたしたちは、ひとびとのいきるすがたに、ふれることができます。わたしは、釜ヶ崎をあるくたびに、とおりで「男娼」や「おかま」のたちすがたを、おもいえがずにはいられなくなるのです。

「生を肯定する」のは、だれが、どこから？

「主体性を返還する」というのは、よくしられたバザーリアのことばですが、それぞれの「論考」において、「肯定する」という「主体」がだれなのか、よくわかりませんでした。たとえば、吉田おさみは、こう書いています。

> 私は今、主体性を奪回するといいました。もともと私たちは対象であったのではありません。そうではなく、狂気とはもともと周囲の抑圧的関係に対する反逆の一つの形態です。ただ、多くの場合、反逆のエネルギーは自己の内部に閉じこめられ、擬制的な自己実現に向うのが常です。従来の治療は（そしてその背景にある健常者社会の要請も）、この反逆をむりやり抑圧するために、患者の物化は避けられませんでした。患者運動とはこの物化から自分たちを解放し、狂気を別の形でとり戻す運動であり、疎外された狂気ではなく、本来の意味での狂気を貫徹する運動です。

> それは、反逆のエネルギーを自己の内部に閉じこめず、これを外化し、共同し、連帯して社会の抑圧的関係を打破しようとする運動です。したがって、それは単なる人権回復運動（差別撤廃運動）にとどまるべきものではなく、狂人として主体的に健常者社会構造との対決をめざす運動なのです。（『“狂気”からの反撃』135 ページ）

このような「狂人として主体的に健常者社会の構造との対決」をめざしたのは、おそらく「第６章」だけだった、といえるのではないでしょうか。

> おそらく古川は、コーヒーを顔に注ぐような実践であったとしても、そこに愛が見い出されるなら肯定するのだ。このようなマゾヒストは、穏当なクリシェの信奉者どころか、極めて病的な存在として浮上するだろう。しかしこのような病的な人物が、愛と暴力を適切に区別できるとしたら、どうだろうか。（『狂気な倫理』128 ページ）

この「病的な存在」を「狂気」とよみかえるならば、ほかのものには「暴力」にみえるもののなかに「適切に」も「愛」をみいだす「狂気」があり、「物化から」――つまり「暴力」から――「自分たちを解放し、狂気を別の形でとり戻す運動」こそが「マゾヒズム」であり、かつまた、その「狂気を別の形でとり戻す」「主体」となることこそがマゾヒストである、ということになります。「第６章」のかきては、「古川裕子」に「主体性を返還する」ことで★2、「本来の意味での狂気を貫徹する運動」にくわわります。つまり、「狂気」の「主体」となるのです。―― 「その意味と重みを、我々は引き受ける必要があるのである。」（『狂気な倫理』129 ページ）

「狂気」の、「狂人として」の「主体」となることは、たんに「狂気」を「肯定する」のとおなじではありません。これについても、吉田おさみは、つぎのようにかいています。

> ところで、健常者の側からの狂気抹殺論に対するアンチテーゼとして患者の側から主張された狂気肯定論は、実は精神病不治説の裏返しとみることができます。狂気肯定論は、いうまでもなく狂気－正気、狂人－健常者の二項対立を大前提とし、狂気、狂人を善とし、みずから狂人として自分を分けている向うの世界、つまり健常者（社会）と対決するというものです。それは鈴木国男さんの「そもそも狂人とは

最後まで人間的たろうとした人のことではないのか」という言葉に代表されます。この狂気肯定論は、健常者社会において圧倒的な狂気抹殺論に対するアンチテーゼとして、患者が自己の存在根拠を確認し、その主体形成を助け、患者の自立に資するという点において、その存在意義を否定することはできないでしょう。ただ、この議論は、狂気－正気、特に狂人－健常者の二項対立を固定化し、絶対化しており、“精神病不治説”を裏返しにした形で、患者－健常者間の交流－連帯を阻害することになります。（『〝狂気”からの反撃』212-213 ページ）

「狂気」を「肯定する」ことにとどまるならば、「狂気」も、マゾヒストも「物」にとどまってしまいます。それは「否定」のうらがえしでしかありません。「第 6 章」がみいだしたように、マゾヒストは「狂気を別の形でとり戻す」「主体」でなければなりません。「マゾヒストにだって愛することはできる」――「マゾヒストの倫理」とは、「われわれは神から幸いをも受けるのだから、災いをも受けるべきではないか」というヨブのように★3、その「重みを」――すなわち「重力」を――「我々は引き受ける」ことに、“はい” ということではないでしょうか★4。そしてそれは、「狂気な倫理」ではないはずです。なぜなら、わたしたちが〝はい” というとき、「狂気」でない「倫理」は、きえさるから、です。

「かれらは、人間を見切った」のか？

わたしも、おさないときに、「妖怪人間ベム」がだいすきでした。ほかならぬわたしも、「はやく人間になりたい」とねがってきた、ひとりです。「第 9 章」をよみ、あらためて「妖怪人間ベム」をみなおして、きになったことがいくつかありました。

もし「妖怪人間」たちが、「細胞から人間を作り出すことに成功した科学者」によって「ある段階までは人為的に作られたとみるのが妥当」（『狂気な倫理』193 ページ）だとしたら、「悪と闘う」というプログラム＝「正義」もまた、「科学者」によって「妖怪人間」たちにあたえられたのかもしれません。その「正義」は「人間」によってつくられたものです。もしそうならば、「妖怪人間」たちは、じぶんではかきかえることのできない、このプログラムに、ただしたがうほかなく、「人間による人間への怨念」からうまれた「人間の力ではどうしようもない敵」をたおすためだけの「人間」のドレイとして、いきるしかありません。ところが「あの最終回のシーン」では、ベム、ベラ、ベロは、このプログラムにしたがうこ

とを、じぶんたちでえらびなおします。つまり、「人間のために」そして、じぶんたちのために、ドレイであることを、えらぶのです。

「人間になる」とはどういうことでしょうか。「かれら妖怪人間は、平時では人間の身体に擬態しているのだが、正義のために悪と戦うときに妖怪の姿を表す。」（191 ページ）なるほど、「妖怪人間」というのは「妖怪」でもあり「人間」でもある（＝「人間」として“パス”できる）、そういうことだったんですね。とすると、「人間になる」とは、「妖怪の姿」「妖怪の身体」をすてることになってしまいます。そして「あの最終回のシーン」で、ベム、ベラ、ベロは「妖怪の身体」をすてて「人間の身体」になると「敵を見抜けられなくなる」ことにきづいてしまいます。「第９章」でかかれているように、そもそものところ、「「異なる者」として差し向けられる抑圧と排除」こそが、「妖怪人間」たちに「はやく人間になりたい」という願望を惹起させ」ていたのですから、「人間」になってしまうと、こんどはじぶんたちが「異なる者」に「抑圧と排除」をさしむけたり、「人間による人間の怨念」にとらわれるかもしれません。

そのうえ、「妖怪人間」たちが「人間」とおもっていたものは、ひょっとすると、もとは「妖怪人間」だったものたちが、「人間の身体」をのっとって「人間」になりかわったすがたかもしれません。それは、おわることのない「怨念」のゲームです。そこで、ベム、ベラ、ベロはめざめたのではないでしょうか。「人間になる」とは「人間の身体」をえることではない、と。「妖怪人間」とは、「狂気・正気を共有し、両者を移行する人間」（『“狂気”からの反撃』214 ページ）のことだったのではないでしょうか。ここで、わたしは、「遺伝的乱行可能性」「進化」「動的編成」という「思弁」をはなれて、やはり、うばわれた「主体性」とベム、ベラ、ベロという「個」をとりもどす、ものがたりとして「妖怪人間ベム」をよみたいとおもいます。

おりしも、「妖怪人間ベム」がつくられた 1968、69、というとしは、石牟礼道子さんの『苦海浄土』がだされたときでもあります。緒方正人さんは『チッソは私である』（2001 年）のなかで、つぎのようにかいています。

> 水俣病事件の中で、人間を暴きだそうとしたはずだけど、どうも仕組みを作って逃れようとしてきたんじゃないか。それは加害者側の問題だけではないように思います。…私たちは、ここにおられる方々も、ここの外におられる方々も、誰しもすでに加害性と被害性を持ち合わせざるをえない存在になっている。ですから、水俣病患者だからといって別枠ではないんじゃないか。さまざまな仕組みや制度が「人間

として」あるいは「人として」という主体を覆い隠してしまっているんではないかということを申し上げたいのです。（『チッソは私である』50 ページ）

「妖怪人間」だからといって「別枠」ではない、「人間の身体」をてにいれて、「抑圧と排除」の「加害者」になることは「人間」ではない、そのことにベム、ベラ、ベロはめざめたのです。そもそも「妖怪人間ベム」では、すがたかたちとっても、どちらが「妖怪」でどちらが「人間」か、さだかではありません。「人間」にみえるひとたちも、「怨念」にとりつかれると、「妖怪」とみわけることができなくなります。「墓場の妖怪博士」では、ベラにうりふたつで「ゴーレム」のいいなりになってひとをころす「女の部下」が「マンストール博士」によってつくられます。ベラと「女」は、みためがそっくりですが、緒方正人さんのいうように「「人間として」あるいは「人として」という主体」となる、というところで、みちはわかれます。「進化」をみおろすたかみから、このわかれみちは、はたしてみえるのでしょうか。

腹の中で水俣病になった子どもを抱えて生きてきた人たちは、「なして自分の家族にはこげん苦労がかかっとやろうか」と、どれほど悔い、あるいは苦しんだか知りません。私の兄弟もそうですのでそう思うわけですが、逆に、考えて考えて苦しんで、その苦悶の中にものすごい振幅があったから、命への向かい方がより本源的といいますか、根源的といいますか、人間的だったんだろうと思うわけです。（『チッソは私である』62 ページ）

つくられた「妖怪人間」こそが「人間的」である★5。ボンヨーながら★6、そうおもいます。ケミストリーから、バイオテクノロジーへ、「社会」「科学」「理論」がどれほど、かわろうと、かわらないものはなんでしょうか。

たくさんの人を苦しめ傷つけてきたチッソという会社であり、逆さに読めば社会、それがもう一つの自分を暴露したんじゃないかという気がするんですね。ですから、チッソというのは私自身のことでもあった気がします。そして恨みを持ってやってきた、親の仇討ちの気持ちでやってきた、あるいは多くの被害者の仇を取ろうとしてやってきた運動のあり方というものに限界を感じ、自分自身が破産していく中で、これは水俣の方では、今までなかなか言えなかったというか、よっぽどの人にしか

> 言えなかったんですが、チッソの人たちをいとおしくさえ思う、罪とか責任というものを共に負いたい、あんたたちばっかり責めんばい、私も背負うという気持ちになったんです。（『チッソは私である』72-72 ページ）

「人間による人間への怨念」がうみだすものと、たたかうなかで、めざめたものは、なんでしょうか。坂本しのぶさんたちのように、「腹の中で水俣病になった子ども」は、うまれながらにして、「水俣病患者」あり「人間」です。このふたつは、きりはなすことができません。「水俣病」にならなかったら「人間」になれただろうか、チッソさえなければ、「人間」でいられただろうか――そうしたまよいこそが、どこまでも、ひとをくるしめます。しかし、そうやってくるしむこと、そして、そのくるしみをうんだ「罪とか責任というものを共に負」うことが、「人間的」なのです。★7

さいごに

> 私は、学問の世界の魅力のひとつは、そのような思想や物言いが、世の中で発せられるための武器や場所を与えることだと信じている。（『狂気な倫理』「まえがき」11 ページ）

なぜ、『狂気な倫理』は、「学問の世界」にこだわるのでしょうか？　というか、「学問の世界」とは「世の中」のどこにあって、なにをすることなのでしょうか？　わたしにとっては、吉田おさみさん、石牟礼道子さん、緒方正人さん、坂本しのぶさん、そのほか、たくさんのなまえ、ことばを、ひとつひとつ、じぶんのからだに、きざみこむこと、じぶんのなかにすまわせること、それらをこえにだして、からだをあたえること、それが「学問」であり、「倫理」である、とおもえてならないのです。★8

水俣病にならんば　私の人生は
でもこれが私の人生
これからは自分自身で
この道を歩いていきます
この道を歩いていきます

坂本しのぶ「これが、わたしの人生」より★9

（臨床哲学ニューズレター掲載にあたっての）注解

★１　わたしは、『狂気な倫理』編者の小西真理子さんと河原梓水さんから、「合評会」でコメントをほしいと、いわれ、河原さんのかきもののファンであったことから、よろこんでひきうけました。わたしは、てっきり、かきてたちとともに、あれこれじゆうに、はなしあうことのできるのだろうと、おもっていました。しかし、当日の合評会の雰囲気は、きわめて儀礼的で、さいしょに小泉義之センセーからのみことばが、かきてたちにくだされ、そのあとも、「質問者」からのコメントと質問にかきてたちが、こたえる、という、たいくつきわまりない、儀式めいたものでした。わたしの発表は、そのような儀式にたいする違和感を表明することから、はじめられたことを、ここにかきそえておきます。そして、わたしのクリエーションは、てんでバラバラな文章たちから、ことばをひろって、ひとつのストーリーをつむぐ、ということにむけられました。また、この発表原稿は、当日、会場のスクリーンにカラフルな背景とともに、投影されましたが、固有名、引用でもちいられていることばをのぞいて、本文中ではいっさい「漢字」をつかわない、という原則でかかれています。その、よみにくさ、についてもあやまりましたが、ここでも、あやまります。ごめんなさい。

★２　よりていねいにいうならば、かきて（そして、よみて）が古川裕子に「主体性を返還する」ことによって、みずから狂気の主体となり、それとどうじに、古川裕子は「主体性を奪還する」、となるでしょう。さもなくば、「狂人として主体的に健常者社会構造との対決をめざす」ことはできません。

★３　『ヨブ記』第２章１０．　義人ヨブは資産をすべてうばわれ、こどもたちもころされるという試練にあいます。これは、「ヨブの足の裏から頭の天辺まで悪い腫れ物」でおおわれ、彼の妻がいった「あなたはまだ自分を全きものにしているのですか。神を呪って死んだらよいのに。」にこたえた、ヨブのことばです。（関根正雄訳、岩波文庫、2023 年、p.13. ）

★４　ここでいう「愛」とは、けっしてロマンティックな、幻想的、幻覚的なものではありません。コーヒーが顔に注がれるのは、人間の意志によるものではなく、すべてがそれにしたがう自然法則による必然であることをうけいれる、ということです。「肉体の苦痛であると同時に魂の苦悩であり、社会的な転落である極端な不幸は、この釘のようなものだ。そのさきは魂の中心にあたっている。釘の頭は空間と時間の全体を通じて散らばるすべての必然である。… そういうものを受ける人は、このはたらきに全然加わっていない。その人は生きながらピンでとめられる蝶のように身をもがく。けれども恐怖を通じて、愛そうとしつづけることができる。そこに不可能はなく、障害もなく、困難もないと言えるくらいだ。」（シモーヌ・ヴェイユ「神への愛と不幸」より、『神を待ちのぞむ』渡辺秀訳、春秋社、2009 年、p.124. ）

★５　「種」としての「人間」と、「主体」としての「人間的」のちがいに、めをむけてください。「知性をそなえた自由な被造物として、人間にまかされる唯一の選択は、服従を望むか望まないかということだけだ。」（シモーヌ・ヴェイユ、同書、p.118. ）

★6　ケンイや、ケンリョク、ちからに、めがくらんで、この「ボンヨー」さのなかにひそむ、ただしさと奇跡にふれないひとは、この文章を永遠に理解できないでしょう。「わたくしたちはただこの愛を自らの魂の中を通過させるために、自分の感情を失うことに同意するだけだ。それは自分自身を否定することだ。わたくしたちはただこの同意のためだけに造られている。」（シモーヌ・ヴェイユ、同書、p.123）

★7　この段落は、ニューズレター掲載にあたって、かきくわえられました。

★8　フォーラムでは、第８章にふれなかったわけについてとわれ、「ストーリーのなかにいれることができなかったから」と、わたしはまろやかにこたえましたが、しょうじきにいうと、第８章をよんで、そこには、わたしの関心をとらえるものがいっさいなく、わたしがいうべきことは、なにもない、とかんがえたからでした。このニューズレター掲載にあたって、著者たちからわたしのコメントについてかきくわえられた応答を、さきによませていただきましたが、やはり、わたしがいうべきことは、なにもない、とおもいます。「ご縁」がなかったのでしょう。

★9　https://minamata195651.jp/exhibit/songs/minamata_song-2.pdf より

（ほんま・なほ）